

「自己決定の大切さ」

「人間はね、この大きな宇宙の中では目に見えないほどの小さい存在なの」、「私も間もなく宇宙の埃になって消えて行くのよ」

老人ホームを訪問した折のこと、自分の部屋に介護相談員である私を招き入れてアルバムを見せてくださった入所者の A さんは、だんだんと見えなくなっていく目を空間に向けて語るのでした。

手作りのメモ帳には、このホームの職員のサインがページを飾っています。私にも是非書くように勧める A さんでした。サインペンで大きく書いた字なら、読んでくださいました。半年ほど前に、母子家庭である娘さんの家に外泊されたときの写真の中で、A さんはおどけた顔でピースサインを見せているのでした。

何度目かの訪問のおり、このホームには A さんの姿がありませんでした。常に身体の痛みのため顔をしかめていた A さんは、数日前に安らかな顔で亡くなられたとのことでした。最近、ホームを終の棲家として考える入居者もあり、ホームの側もそういう希望を受け入れるようになってきています。

昔は、ほとんどの人が自宅で最期を迎えたものです。それがやがて「病院で最期」というように変わってきました。今から 50 年前、私の母親が亡くなったころは、病院で「最善を尽くす」ことが親に対する孝行だと考える時代でした。当時最高の技術によって手術は成功したそうですが、結果的には、患者である母は術後に肺炎を起こし、気管に穴を開けて「最善を尽くした」揚句、言葉を交わすことなくこの世を去ってしまいました。本人は自分の病気について何も知らされないままでした。

明治生まれの女性の多くがそうであったように、母は自分の意思を極力抑え、ただ夫に従い世間のシキタリを守り、子育てに一生を捧げた人でした。

現在、ホームに入っている人の多くは大正生まれで、私の母と比べればいくらかは自我を出されますが、それでも、「自己決定」をされることが多くない世代であり、強い自己主張を耳にすることは多くありません。

そういう中で、A さんは、どこか哲学を語る雰囲気を持ち、自分の死についても自然体で受け入れておられた感じでした。今の社会が、そういう彼女の考えをどの程度まで当たり前のように受け入れているかはわかりませんが、このホームのスタッフは、比較的、自然に受け入れたのではないかと私は感じました。

本人の意思とは無関係に，世の中のシキタリで「最善を尽くす」として身体に一杯管をつけて生かされるケースをよく見ますが，それが本当にその方の意に沿うことだろうか，と疑問をもちます。「自己決定」についてこだわることの大切さを，自分の周囲で語り合うことが大切ではないかと思っております。

京都市介護相談員 梶 宏